

広島大学学術情報リポジトリ

Hiroshima University Institutional Repository

Title	英語の意味変化について 〈卒論要旨〉
Author(s)	小野, 正恵
Citation	広大言語 , 7 : 68 - 69
Issue Date	1967-12-18
DOI	
Self DOI	
URL	http://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00046278
Right	
Relation	



〔 卒 論 要 旨 〕

「 英 語 の 意 味 変 化 に つ い て 」

小 野 正 恵

一つ一つの語には、伝統的な適用の範囲がある。すなわち「意味範囲」といわれるものである。普通これは安定しているが、いろいろの「要因」によって影響されることがあり、したがっていろいろの項目がつけ加えられたり、さし引かれたりする。その結果「意味変化」が起こるのであるが、ここでは、この「意味変化」を起こす原因を詳しく分類することによって考察する。

まず大別して、意図的なもの（話者の意志が介入しているもの）と、非意図的なもの（自然的過程の自動的なもの）とに二分する。次に前者を、Ⅰ 命名（隠喩、婉曲法、緩叙法、タブー、反語）、Ⅱ 話し行為の節約 Ⅲ 抽象的過程を一層現実のものにする努力、後者を、Ⅰ 指示物の進化、Ⅱ 社会的な成層 Ⅲ 意味の交替 Ⅳ 誤用 Ⅴ 情動の力、にそれぞれ再分類をし、具体的用例を挙げて説明する。なお、意図的、非意図的なものの区別が不可能なものとして、「類推」を挙げる。しかし、これらがそれぞれ単一の原因によるものもあれば、二・三と原因が継続して起こる場合もあるため、一層複雑となる。

なお才三章では、さらに「意味変化の分類」に進む。ここでは特に、Ⅰ 原因的分类(Meillet) Ⅱ 機能的分類(Ullmann) Ⅲ 経験的分类(Stern)の三つの型をとりあげ、それぞれの長所・短所を比較検討する。

「意味変化」の原因を法則化することは、あまりにそれが多様すぎて不可能に近い。結局それは統計上での傾向にすぎないということに気がついた。がしかし、一方では、それだからこそ、「意味変化」の研究にますます興味をそそられるのである。

参考文献

- Meillet: Linguistique historique et linguistique générale
- Bloomfield: Language
- O. Jespersen: Language
- Stern : 意味と意味変化（五島忠久訳）
- Ullmann : 意味論（山口秀夫訳）
- H. Paul : 言語史原理（福本喜之助訳）

- Guiraud : 意味論 (佐藤信夫訳)
- Bladley : The making of the English
- 小林 智賀平 : 言語学初歩

英語学概論

(文責 村上)

「天草版伊曾保物語における語彙について」 (漢語に注目して)

折 出 朋 子

漢語は、いつの時代にも、さまざまな形で、日本語の中に深く入り込んできた。しかし、漢語は、口語ではそれほど多く使われないと言われる。しかしながら天草版伊曾保物語は、口語表現であるにもかかわらず、漢語の量が多い。それは、日本耶蘇会が、伝道に使うためのことばは立派なものであることを方針としてきたから、上等のことばと考えられた漢語が、自然多く使われたのであろう。そこで、室町時代末期のキリシタン資料である、天草版伊曾保物語において、どういった漢語が、どのように使われているかという実態を見てゆくことにした。ここでは、

1. 国語に於ける漢語の品詞性
2. 漢語のよみ方の変化
3. 漢語の浸透

を、この一時期、一資料だけに焦点をあてて調べた。資料を天草版伊曾保物語にしぼったことは、文の内容から、天草版平家物語や、狂言、抄物などとは、語彙の質が違うと考えたからであったが、違った方面で道が開けていたかもしれない。伊曾保物語で漢語と和語に対する意識の違いはどうか、という問題も考えてみたが、ニュアンスの差こそあれ、漢語、和語ということでは使い分けされているとは考えられなかった。

まだ研究すべき点が、多く残っているように思う。これをひとつの経験として、これからも未知のものを求めてゆきたい。

参考文献

日本語の歴史

土 井 忠 生

近古の国語 (国語科学講座 V)

”